

「表現の不自由展・その後」の

再開をもとめた市民の連帯とは

何であったのか？

高橋良平

(「表現の不自由展・その後」をつなげる愛知の会)

○開催・中止・再開の経過

「表現の不自由展・その後」を含むあいちトリエンナーレ 2019 は 10 月 14 日に閉幕しました。8 月 3 日に中止が決定され、二か月にわたる中止期間をへて 10 月 8 日に再開されてからのことです。まずはざっと流れを振り返りたいと思います。ちなみに事実についての情報はおもにあいちトリエンナーレのあり方検証委員会中間報告(2019 年 9 月 25 日)と美術手帖 WEB に拠っています。

7 月 31 日中日新聞と朝日新聞の朝刊に「表現の不自由展・その後」出品作品が報道される。高須克弥氏、百田尚樹氏らが Twitter で「平和の少女像」の展示を問題視し、ほぼ同時に事務局への抗議電話が始まる。午後には事務局の電話回線がパンク状態になる。

8 月 1 日松井一郎大阪市長が問題視し、河村たかし名古屋市長に問い合わせると発言する。この日には自民党の和田政宗氏が問題視する発言を twitter で行っている。小坪しんや行橋市市議会議員が、自身の WEB ページで企画展を問題視し、抗議と拡散を呼びかける。その後、連絡先や協賛企業一覧、抗議の仕方などを掲載し電凸を煽るコメントを繰り返す。事務局へ抗議電話が殺到、他業務が行えない状態となる。併せてメール・FAX が殺到。「表現の不自由展・その後」に関する問い合わせ件数=705 (電話 200、メール 500、FAX5)。

8 月 2 日朝、県美術館にガソリンテロを予告する脅迫 FAX が届く。警察へ通報する。菅義偉官房長官、柴山昌彦文部科学大臣が会見で、補助金交付決定に対して「事実関係を確認した上で適切に対応」する旨の発言をする。河村たかし名古屋市長が視察し「どう考えても日本人の心を踏みにじるものだ。即刻中止していただきたい」と発言する。芸術監督・津田大介、記者会見で河村たかし名古屋市長の発言など政治家による企画展問題視発言を検閲となる可

能性があり問題であると主張。また企画展に展示されていない作品までも展示されているような誤情報が Twitter で流布されていることを問題視する(安倍晋三と菅義偉の顔がハイヒールで踏まれている絵)。同日夜、事態の推移に企画展の中止を憂いた井口大介氏が中止しようようもとめる電子署名 change.org を開始する(8 月 16 日に一次提出分として 26665 筆を愛知県に提出)。この日の問い合わせ件数=1106 (電話 200、メール 890、FAX16)。

8 月 3 日、「表現の不自由展・その後」実行委員会が中止を懸念し応援をもとめるアピールを発する。大村知事と津田大介氏が中止を発表する。あいちトリ《平和の碑》撤去に反対する有志グループによる中止撤回をもとめる署名がはじまる。「表現の不自由展・その後」実行委員会が中止に抗議する声明を発表する。その声明の最後には裁判のことにも言及があった。問い合わせ件数=1075 (電話 200、メール 840、FAX35)。

8 月 4 日からは「見たかったのに！」を合い言葉に「表現の不自由展・その後」の再開をもとめる県民の会がスタートし自分もそこに参加することになる。また栄では Antifa758 主催の河村たかし名古屋市長への抗議集会が開催された。そして各地の言論団体や文化団体が中止に抗議する声明をあげ始めた。特徴的なのは、抗議はおもに河村たかし名古屋市長に対するものであり、主催者の大村知事に対しては万全の準備を整えてからの再開をもとめるという内容が多数であったことである。ところで企画展実行委員の小倉利丸氏は季刊誌ピープルズプラン 86 号への原稿において「中止の原因となった放火脅迫についても、捜査機関に被害届けなどの手続きがなされたのは展覧会が中止された後、数日たってからのことである。」と書いてある。また抗議電話への対応も事前の協議内容と異なっていたと主張している。そして検証委員会では、なぜすぐに被害届けが提出されなかったのか、について検証も言及もされていない。

その後の経緯を駆け足でまとめると、海外の作家を中心に作家が出展をボイコットし大村知事をはじめとする実行委員会が動揺する中で、河村たかし名古屋市長をはじめとする企画展反対派が「公金投入はけしからん」などと発言、それに大村知事が表現の自由と憲法 21 条を対置するなどし(世論の大勢は大村知事についていたように思える)、日本人の作家も Re-FreedomAichi を結成し再開に向けて動き

をはじめ。企画展の実行委員会は再三にわたり大村知事との話し合いをもとめるも実現せず、その代わりに検証委員会での検証が大村知事により提案され津田大介氏はそれを認める。そして二回にわたる検証委員会の開催と、その後の企画展実の仮処分の裁判が開始される。その間「表現の不自由展・その後」の再開をもとめる愛知県民の会は連日のスタンディング、抗議声明、再開をもとめる共同要請書提出、集会とデモなどを組織していった。インターネットなどでは大村知事と津田大介氏に対する批判が盛んに行われ、企画展を「反日ヘイト」と誹謗中傷する内容が多数であった。

山場は第3回目の検証委員会であったように思われる。この場で展示再開が示される（検証委員会に検討委員会に変更となり、再開条件を提示するようになる）。その前に企画展実の仮処分の裁判が素早くかつ裁判所の丁寧な進行で進んでいた。また日本人作家も展示内容を変えたり、そして日本統治時代の台湾を題材にしたインスタレーションを出品している藤井光氏が展示ボイコットをはじめた。さらにキャンディス・ブレイツ氏がボイコットを表明した。このタイミングでのボイコットの表明はあいちトリエンナーレ 2019 全体がボイコットによって幕を閉じるという前代未聞の危険性を警告していた。これらの圧力が大村知事をして再開に向かわせた一つの大きな要因であったと考える。

しかし、再開を示されてからが長かった。県民の会はあまりにも調整が難航していることにしびれを切らし、公開の場での協議をもとめる要請書をトリエンナーレ実行委員会に提出した。そして10月7日、8日に試験的に再開することが明らかにされ、その再開条件が提示された。そこには抽選による人数制限、金属探知機を使った全身のチェック、手荷物の預かり、SNSでの拡散の禁止、という「テロ対策」が徹底された再開があった。県民の会は再開が決定された後に再開の不十分さを指摘し、今からこそが市民の運動の本領発揮、不十分な再開を是正すべく申し入れを行ったが周囲の反応もトリエンナーレ実行委員会からの反応も芳しくはなかった。結果10月8日から14日まで再開され、当初禁止だった報道関係者への展覧会報道がなされた以外は若干1日当たりの閲覧回数が増やされる程度で基本再開条件が維持されたままであった。河村たかし名古屋市長は8日に中止に抗議する座り込みを行い、「陛下への侮辱を許すのか！」と書かれたプラカードを掲

げた。「遠近を抱えて PART II」を意識してのことだった。



○一体何が問題だったのか？そして市民の連帯は何であったのか？

そもそも「情の時代」をテーマに近年国際的に問題になっている差別排外主義などを、芸術作品を通じて対話してその解決方向を探るという「情をもって情を制す」があいちトリエンナーレ 2019 のコンセプトであった。そして検閲をテーマに「平和の少女像」や「遠近を抱えて PART II」などの植民地主義や天皇制を題材とした企画展「表現の不自由展・その後」は一つの重要で大きな展覧会内展覧会であり、津田大介氏が自ら企画展実と連絡を取り実現を可能とした経緯を持つほどの入れ込みようであった。それが先述したような大規模な開催反対にあり、中止を余儀なくされてしまった。そして抽選による人数制限、金属探知機を使った全身のチェック、手荷物の預かり、SNSでの拡散の禁止を条件に最後の1週間によろやと再開された。このような展覧会はおそらく前代未聞のことだろう。作品の前で話し合うことも、なぜに検閲を受けざるを得なかったかを考える契機もほぼ難しかったのではないだろうか？再開出来たことは本当に嬉しいことだが、再開自体が目的化してしまい、企画展の趣旨や何のための再開なのか、そしてそもそも中止に追い込んだものは何であったのか、といった課題はほぼほぼ放置されたままであったように思われる。

また現在、オーストリアでの芸術祭での作品を問題視（天皇制や植民地主義も題材にされている）して日本大使館が主催から手を引いたり、映画祭や芸術祭に対する圧力、文化庁の補助金不交付決定、そして河村たかし名古屋市長による津田大介氏への脅迫訴訟の示唆、ハンブルグでの「平和の少女像」展示に対する海外在住日本人市民団体による中止要求、

など問題は収束どころか深刻化さえしている。そして公共の施設から問題意識の高い企画展がなくなるのではないかと、という危惧や天皇制に反対する作品の展示が難しくなるのではないかとという危惧が出されている（事実山下菊二の展覧会は未だに天皇制を外した形でしか公立の美術館では開催されていないという）。また今回のような実行委員会形式ではあるが、ほぼ実際は自治体が主催している芸術祭の在り様が、ますます市民から離れてしまう危険性もあるだろう。

そして何と言っても一番の問題は、日本社会の歴史認識、日本の侵略、植民地政策、戦争加害、性暴力、天皇制の強制という、反人道的、反人権的な歴史への根本的な反省、またそのまがった歴史を正しい方向に転換させるという努力の少なさが企画展への脅迫、圧力、抗議で露呈されたにも関わらずほぼ放置されたままであるということだ。むしろ今回の企画展の開催・中止・再開が、歴史認識の問題を悪化させる契機となってしまっている可能性すらある。関連にして付け加えるならば、私たちが取り組んだ歴史の事実と表現の自由の二本を柱とする再開をもとめる共同要請書（9月11日提出。その時点での賛同は174団体）には、日本軍「慰安婦」問題に取り組んできた市民団体と革新懇、それに反天皇制市民団体、一部の市民団体などにほぼ限定され、中止後に抗議声明を出した団体の多数は参加しなかった。興味関心と問題意識は非常に高かったが、この問題をどのように解釈すれば良いのか、についての認識は非常にバラバラであったということではないだろうか？

しかし、私たち市民は立ちあがり、多くの献身的な活動によって最後まで運動を貫徹することができた。そのことは本当にすごいことだと思う。本当に尊敬に値することだと思う。なぜ市民はここまで闘うことが出来たのだろうか？ その一つの大きな理由は「平和の少女像」がもたらしたものであると思う。私たちの運動では月日が経つにつれ「平和の少女像」が一つの象徴として機能していった。チラシも大切であったが「平和の少女像」を提示していたことが何よりのアピールであり、そしてその思いが運動のなかで広がっていったように思われる。海外からの旅行者も「平和の少女像」の横断幕を見て何が起きているかを理解してくれた。当初一番攻撃にさらされた「平和の少女像」が、その攻撃に対する反撃の象徴として機能していたように思える。そし

てそれは無論歴史改ざん主義や表現の自由に対する攻撃への抗議の意味でもあるが、より深いものであったように思える。

戦争被害、性的被害、そしてその被害のない平和な世界を願う少女の像、その像に対する攻撃に多くの市民もまた傷ついたのでないだろうか？だからこそ、自分の問題として立ちあがり行動したのではないだろうか？人間が人間らしく幸福に生きるためには衣食住だけではなく、人とのつながり、そして尊厳が欠かせないと思う。そしてその尊厳を奪われた存在こそ侵略の、植民地化の、戦争の、性的奴隷制度の、そして暴力の被害者ではないだろうか？脅迫、圧力、抗議によって被害者の尊厳がふたたび攻撃されたことに、多くの市民が傷つき、被害者の、さらには自らの尊厳の回復のために立ち上がり行動したのではないだろうか？そう思えた時に、私はこの再開をもとめた市民の連帯に参加出来たことを誇りに思うし、みずからの人生をより良いものに変えることがほんの少し出来たような気がする。だが、いまだに被害者の尊厳も名誉も回復されていない。日本政府は侵略、植民地支配、性的奴隷制度と性暴力への公式な謝罪も補償も行っていない。そして脅迫者たちを駆り立てた侵略、植民地主義、民族差別、性差別、天皇主義は今も健在で、むしろ勢いを増しているようにすら思える。日本各地ではいまだに在日朝鮮人の民族教育をはじめとするさまざまな差別が続いている。戦後日本は変わったと言われるが、本当のところは変わらずに一貫しているのではないかと私は疑う。私たちはこの一貫した間違った歴史の方向を根本から変える必要があるし、そのためにまだまだ闘いつづけなければならないだろう。本当に大変なことだ。でも、市民の連帯は傷ついた尊厳を回復させることが出来る。そう思う。そしてそのような運動が間違った歴史の方向を正しい、一人一人の人間の尊厳と自由が尊重される歴史の方向へと転換させる力を持っていると思う。そこにかすかな希望を見出し、今後も多くの方々と共に歩んでいけたらと思う。道は長いかもしれないけれど、**Oh! Deep in my heart. I do believe** だ！

さいごに紙面をお借りして「表現の不自由展・その後」の中止と再開をもとめる運動を今回振り返る機会を頂いたことに感謝申し上げます。そしてこの間多くの参加とご協力を頂いたことにかさねて感謝申し上げます。今後ともよろしくおねがいします！